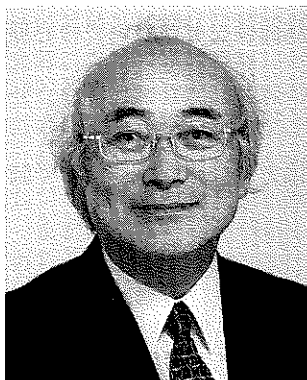


日本カウンセリング学会

第14号

認定カウンセラー会 ニュースレター

日本カウンセリング学会 認定カウンセラー会
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-5-2 佑和(ゆうわ)ビル2F
 TEL&FAX 03-6304-1233



想像しよう！ カウンセリングが普及した日本を

認定カウンセラー会会長 田上不二夫

1 社会貢献

“認定カウンセラーになると、どんなメリットがありますか？”という問いには、“日本にカウンセリングを広め定着させ、人びとをエンパワーすることに貢献できます”と答えよう。

想像してみよう！ 日本の将来の社会を。日本文化に根づいたカウンセリングを。

認定カウンセラー会は、ささやかかもしれないけれど偉大な第一歩を踏み出しました。東日本大震災の復興支援や悲しみを分かち合う会に継続的に取り組んでいます。地域に根づいた活動を始めるために、日本カウンセリング学会の支部づくりの中核となって多くの支部を実現させたのも認定カウンセラー会のメンバーです。カウンセラーとしての力量を高めるために、相互研究会、危機支援研修会、キャリア・カウンセリング部会ワークショップなど自己研鑽を積むための企画を実現させました。認定カウンセラー会は確実に前進しています。

また認定カウンセラー会のメンバーは組織として社会に貢献するだけでなく、個人としても日本社会のなかでカウンセラーとしての専門性を発揮しています。

認定カウンセラー会は日本社会で生きる人びとをエンパワーし、人びとが教育やキャリアの目標を達成し、社会生活を充実させることに貢献するとともに、すべての国民がカウンセリング・サービスを受けられるように努力します。そのためにはカウンセリングが国民に理解されることと普及が必要です。

2 日本のカウンセリング

想像してみよう！ 日本文化に根づいたカウンセリングを。

日本のどこで、カウンセリングは行われているでしょう。教師が、看護師が、福祉士が、働く人がカウンセリングをしています。カウンセラーとしての専門職として働いている人の数は少ないかもしれませんが、カウンセリングを学び実践している人は大勢います。これが日本の現状ですし、日本カウンセリング学会が率先して支援してきた事です。

教育、福祉、医療、産業などの仕事の領域でカウンセリングを活用する認定カウンセラーがいます。そして学校や企業などの組織やコミュニティなどで専門職としてのカウンセリング活動を行うとともに、組織やコミュニティの人

びとがスムーズにカウンセリングを活用できるようにサポートしている認定カウンセラーがいます。

私は確信します。少しずつ日本の専門職としてのカウンセリングが姿を現してきた事を。

日本のカウンセリングの将来は現状を制度として発展させていくところにあるでしょう。多くの実践が行われるようになり、日本における専門職業人としてのカウンセラーの仕事が少しずつ明らかになってきました。

たとえば学校領域を例にしましょう。

もともと学校では教師が生徒指導や教育相談係として、また担任として進路指導や学級経営や学校生活について配慮するなかで児童・生徒にカウンセリングを行ってきました。そこに専門職としてのカウンセラーが参加しました。教師と連携して仕事する専門職業人としてのカウンセラーの仕事として以下の事が考えられます。

- ①児童・生徒と保護者との個人カウンセリングと発達課題やキャリア・ガイダンスや家族関係などについての心理教育活動を教師と連携して行う事。
- ②児童・生徒や学校・学級集団のアセスメントとそれに基づいた教育計画を教師と連携して立てる事。
- ③教師をエンパワーする事。教育活動に関するコンサルテーションや教師同士をつなげ協力し合う関係づくりや制度づくりに助力する事。
- ④校内研修会で、学校で使えるカウンセリングの理論とスキルについて教師に伝える事。
- ⑤学校を地域とつなげ、学校が容易に地域資源を活用できるようにする事。
- ⑥その他、児童・生徒が学業生活を快適におくり将来のなりたい自分に近づくことができるように支援するとともに、教師が自分の職業生活や社会生活を充実させることができるように支援する事。

これらの仕事を行うにあたり、カウンセラーは教師から学び続ける事が大切です。そのほかにも、やるべき仕事があるでしょう。

教育領域のみならず、産業や福祉や医療領域などにおいても、専門職としてのカウンセラーの仕事内容が明らかになりつつあります。

3 仕事の開拓

日本社会の専門職カウンセラーに必要とされる能力は何でしょう。カウンセリングの定義と使命からカウンセラーに必要となる能力を演繹的に考えることと、日本社会で必要となるカウンセラーの能力から帰納的に考える二側面が必要です。

日本カウンセリング学会で、“カウンセリング心理学ハンドブック”三部作を公刊されたのは画期的な事でした。日本カウンセリング学会が考える“標準的カウンセリング”について世の中に公表できたからです。安心して医療が受けられるのは、どの医療機関に行っても標準的な医療が受けられるからではないでしょうか。カウンセリングも標準化が必要です。

認定カウンセラー会のメンバーが共有する“標準的カウンセリング”についてテキストができたらと想像します。カウンセリングの普及には、利用者がわかりやすいカウンセリングが必須条件だからです。

“標準的カウンセリング”には、①すべてのカウンセラーが有している能力、②特別に訓練を受けている専門能力、③実践領域に関する能力などの区分が考えられます。

社会から要請があったときに、要請された仕事ができるカウンセラーを準備しておくことがカウンセラーの仕事の開拓につながります。社会のニーズに敏感になるだけではなく、ニーズを生み出すための提言も重要となるでしょう。

想像しましょう。日本にカウンセリングが普及した世界を。

緊急特集 「いじめ・いじめ自殺（自死）・体罰」の根絶に向けて

依存と支配

鈴木 敏城（学校カウンセリング部会・奥羽大学）

2012年の後半から2013年の前半にかけて、教育がまた社会から負の注目を集めています。いじめ、体罰、学級崩壊、学力低下、道徳性、非行、暴力、追い詰められた子どもたちの自らの死。中でもいじめと体罰は社会が強く見詰めているようです。

いじめと体罰には相違点も多くあります。しかし、いじめと体罰の背景には共通点もみられます。この共通点を考えることは、学校カウンセリングを考えることに他ならないのではないのでしょうか。学校でいじめが発生するのはなぜなのでしょう。教育の世界で体罰が容認されてきたのはなぜなのでしょう。私たちの教育には何が足りなかったのでしょうか。

私たちの社会の教育をめぐる課題であるいじめと体罰について、私は社会の一員としての大人の集合的責任を意識しつつ語っていきたいと思います。

まずは、いじめについてです。いじめは3種類に分けて考えることが可能です。「排除のいじめ」、「取込みのいじめ」、「情報操作のいじめ」です。「排除のいじめ」は、仲間からははずす無視するなど、いじめの対象を自分たちの枠の外に置き続けようとします。内と外を明確に分けることを目的に、言葉や無言の圧力や物理的な力で心と体に暴力を加えます。「取込みのいじめ」は、いじめの対象を自分たちの枠の中に取り込み、枠内の最下位者と位置づけ、いたぶってもよいものとして心と体に暴力を加えます。「情報操作のいじめ」は、インターネットや携帯電話などで、いじめの対象に関するデマや流言、秘密や映像などを流し心に暴力を加えます。

これら3つのいじめに共通するのは、対人関係での位置づけや情報といった個人の尊厳に関する問題がターゲットになっていることです。いじめられた者は心と体を傷つけられ、自由や判断力を奪われ、さらに尊厳を傷つけられます。そして、自分が悪いと思込まれコントロールされ抵抗できなくなるのです。

したがって、いじめとは他者の尊厳をもてあそぶ行為であるとまとめることができるでしょう。学校で、いじめを疑った教師が問い詰めると、いじめっ子は「遊び」だと答え、いじめか遊びかの決着がつかず問題が長引くことがあります。教師は相手が苦しんでいるからいじめだと言い、いじめっ子は遊びとして楽しんでいるだけだと言います。大人の側に説得力が欠けることが多いのです。

私は、いじめは遊びだと考えています。遊びだからといって、いじめを許しているわけではありません。決して、してはいけない遊びがあるのです。いじめは他者の尊厳を傷つけ、自由と判断力を奪います。いじめる者はいじめることによって他者を支配しています。他者を支配することで喜びを感じるような遊びはしてはならないのです。だから、いじめっ子には、他人を道具にして楽しむこと、他人を犠牲にした遊びはしてはいけないとせまらなければならないのです。

いじめる側は本人が意識していなくても、他者を支配することで喜びを感じています。他者を犠牲にしなければ自分の存在を確認できないということは、支配や暴力という形で現れた依存です。

次に体罰について考えてみましょう。体罰を行う者は、体罰を指導の一環だと言います。児童生徒の精神を強くし、善悪のけじめを教えるには体罰も有効だと言います。しかし、暴力によって強くなった精神とはどのようなものでしょうか。暴力によって教えられた善悪のけじめとは何でしょうか。暴力によって植え付けられた善悪の判断は、暴力を使う者によって与えられた善悪の判断です。暴力を受けることによって強くなった精神力とは、支配され服従することに耐える精神力です。

暴力は相手に恐怖と不安を植え付けます。つまり、体罰は暴力による恐怖と不安を利用した指導ということになります。まず恐怖や不安を与えておいて、暴力を背景とした指導に従うとその不安や恐怖が抑えられるサイクルが造られているのです。これは、支配のサイクルです。

中には、支配のサイクルから脱出できる児童生徒もいますが、苦しみながら耐えている児童生徒も多いのです。また、このサイクルに支配されてしまった児童生徒は悪いのは自分だと思込んでしまいます。そして、支配に服従することで達成感を感じさせられてしまうのです。

教育は、支配ではありません。教育は、心と体と知恵と人間関係の発達を促す営みです。教育は、人格の発達を促すことを前提とします。支配と服従は人格を傷付ける結果しか生みません。

体罰を行う者は、体罰による支配を教育的な指導だと錯覚しています。体罰に対する恐怖で人を支配し、支配された者たちが自分の指示に従うことが教育的な成果だと錯覚しています。人を支配し、人を自分に従わせたいという欲求は幼児的な欲求です。未発達な自我が、他者を支配するという形で依存性を表現しているのです。

このようにみえてくると、いじめる者と体罰を行う者の共通点が発見できます。両者に共通しているのは、他者への依存性を、他者を支配するという攻撃性で表現しようとする未熟な自我の姿です。そして、他者を攻撃し支配しなければ自己を確認できない悲しい自我の姿です。

学校における体罰といじめの問題は、50年100年の単位で考えられてきた問題です。体罰もいじめも問題にされながら続いてきました。何十年も改善されないということは、学校にはいじめと体罰を維持する要因があったのではないのでしょうか。

学校は、未熟な自我が持つ他者への依存性を、他者を支配する攻撃性という暴力で表現することを防ぎ切れていません。学校に何が足りなかったのでしょうか。

教育にはルールが必要です。ルールのないところでは教育はなりたちません。したがって、崩壊学級では教育はなりたちません。

教育に必要なルールとは、他者を自己と同じように尊重し、他者が持つ自己と等しい権利を侵害しない範囲において自己の可能性を拡大できるというルールです。この平等のルールを前提にしたリレーションの中で児童生徒の心は豊かになり、大人としての責任と自由の自覚を発達させることができるのです。

もちろん、児童生徒にこの論理をそのまま説明する訳ではありません。しかし、この論理を教師が自覚していなければ教育は成り立たないのです。

学級でいじめが行われ、学校で体罰が容認されるということは、学級・学校に、他者を尊重する社会の基本的なルールが成立していないことになります。

他者を自分と同等の人間存在として尊重するというルールを否定する教師はいません。問題は、このルールが機能しない学級と学校があるということです。

教室で社会のルールが機能しないとすれば、それは社会の安全と成長に責任を持つ社会の成員としての大人の問題でもあるのです。私たち大人が造った学校にいじめや体罰が存在するという事は、私たち大人が他者を尊重せず、他者に対する依存性を、他者を支配する攻撃性という形で表現することから自由になっていないからではないのでしょうか。学校でいじめの発見が遅れ、教育の世界で体罰を容認してきた責任は、学校と教育を造ってきた私たち大人が担うべき集合的責任です。

理屈ばかり語っても未来は開けません。方法を語らなければ何も変わりません。子どもたちが学校で多くの時間を過ごすのは学級です。学級を集団として発達させなければ、いじめはなくなりません。今、学校現場で注目されているのは、早稲田大学の河村茂雄教授が開発したQ-Uです。Q-Uは、学級にルールのあるリレーションを実現させる指針を与えてくれます。

学級にルールのあるリレーションが実現すれば、子どもたちの心に依存性を克服したいという欲求が生まれます。これは、いじめという支配を防ぐカギになります。教師がルールのあるリレーションを重視した学級経営のスキルを身に付けることは、教師の専門性をより高めます。それは、体罰という支配を防ぐカギとなります。

私は大人としての集合的責任と教師としての集合的責任を果たすために、学級経営を見つめ直していきたいと思えます。

いじめ・体罰と子どもの自殺予防

新井 肇 (兵庫教育大学大学院教授)

いじめ・体罰と暴力

一昨年の大津の中学校でのいじめ自殺、昨年末の大阪市立桜宮高校での体罰による自殺、さらに今年に入り、大阪の大東市で「統廃合中止」を訴えるメモを残した小学校5年生の自殺など、子どものいのちをめぐる痛ましい事件が続いている。

いじめにせよ、体罰にせよ、その根底には人間の存在そのものを脅かす暴力が介在している。森田(1999)が指摘するように、暴力を受けると私たちは恐怖または強い不安を感じ、「安心」して生きる権利や「自信」をもって生きる権利を奪われ、行動の選択肢を狭められ、自分で選ぶ「自由」の権利も奪われてしまうことになる。ここで言う暴力には、有形力を加える物理的・身体的攻撃のみならず、暴言・無視・嫌がらせといった心理的攻撃も含まれる。外からは一見些細にみえることでも、それが執拗に繰り返されれば、当該の子どもにとっては深甚な心身への打撃となり、その結果、生きる力の喪失を招くことにもなりかねない。

いじめや暴力により長期間にわたる心身のストレスを受け続けていると、自尊感情が深く傷つけられる。しかも、被害が屈辱的であるため、特に思春期以降においては、いじめ＝「弱い者いじめ」というとらえ方のなかで自己のプライドを守ろうとするあまり、かたくなにいじめの事実を認めようとしなかったり、「自分は弱い人間なのだ」という心理に囲い込まれて自己評価が低くなった結果、加害者を告発する意欲を奪われ、無力感に陥ってしまったりする場合も多い。いじめ－いじめられ、支配－被支配という関係性のとらわれから逃れられなくなるのである。

この心理は、次に示す自殺に追いつめられたときの心理と重なるところが多い。

自殺に追いつめられる心理

①強い孤立感：「孤立」は自殺を理解するキーワードである。「誰も自分のことなんか考えていない」とじか思えな

くなり、現実には援助の手が差し伸べられているにもかかわらず、頑なに自分の殻に閉じこもってしまう。

②無価値感：「自分なんか生きていても仕方がない」。親から愛される存在として認められた経験が乏しい子どもに典型的にみられる感覚。

③怒りの感情：自分の置かれているつらい状況を受け入れることができず、やり場のない気持ちを他者への攻撃性として表す。その怒りが自分自身に向けられると、自殺の危険が高まる。

④苦しみが永遠に続くという思いこみ：今抱えている苦しみはどうか努力しても解決できないという絶望的な感情に陥る。

⑤心理的視野狭窄：解決策に自殺以外の選択肢が思い浮かばなくなる。

また、子どもの自殺には、大人と比べてときに、①衝動性が高い、②大人からみると些細に思える動機で死を選ぶこともある、③影響されやすさから、自殺の連鎖（「群発自殺」）が起こりかねない ④純粹さ、敏感さ、傷つきやすさが死に向かわせる、といった特徴がみられる。大東市の小学生の自殺なども、周囲が予見することは難しかった事案と思われるが、子どもの自殺の特徴を知るとともに、子どもには大人が思っている以上に死への親近性があることを認識する必要がある。

阪中（2011）の調査によれば、ある中学校の生活アンケートの「この頃死にたいと思ったことがあるか」との質問項目に対する回答で、「その通りだ」と答えた生徒が10年間の平均で、10人に1人はいるという。中3の女子の場合は、6人に1人という数字も示されている。子どもたちは思春期になると真剣に生きることを考え始める。だからこそ、その裏返しとして死への想いも頭をよぎるようになる。沖縄県での高校生の調査（高倉、2012）でも、男子4.6%、女子9.3%が「真剣に自殺を考えたことがある」と回答している。

最後の藁一本

では、子どもの自殺を防ぐにはどうしたらよいのであろうか。

これまで、いじめも体罰も、自殺と結びついたときのみ社会問題化してきた。そのため、子どもの自殺の背景にいじめが絡んでいるケースが数多くあると思われがちであるが、警察庁の調査（2011）において、自殺の原因としていじめが特定されたものは全体の2.6%に過ぎない。勿論、遺書も何も残さないため原因不明とされるケースが半数以上あるので即断はできないが、いじめや体罰だけの解決をめざしても子どもたちの自殺は減らないと思われる。いじめや体罰の防止は喫緊に取り組むべき重要な問題であるが、自殺は一つの原因で起こるというよりも、多くの原因が輻射した結果引き起こされるものだからである。

最後の藁一本(the last straw)という寓話がある。沢山の荷物を背負わされた駱駝が砂漠を歩き目一杯の状態になったとき、背中に新たな藁を一本を載せられただけでヘナヘナと倒れ込んでしまうというのである。つまり、「最後の藁一本」を倒れた原因とみるのではなく、それまでに背負わされていた沢山の荷物のことを考えないと、駱駝を生かすことはできない。同じように、自殺は本人の心理的・身体的・家庭的要因や学業や友人関係などの学校生活上の問題、進路問題などが複雑に絡み合っただけで自殺の準備状態ができたところへ、直接動機となる事柄が引き金となって実行されると考えられる。直接のきっかけが自殺の原因としてとらえられがちであるが、自殺を理解するためには様々な要因が重なった準備状態に目を向ける必要がある。

自殺に至る危険因子（risk factors）としては、次のようなものがあげられる。

- ①自殺未遂歴（リストカット、薬の大量服用などを含む）
- ②精神疾患（うつ病、統合失調症、パーソナリティ障害、薬物乱用など）
- ③安心感のない家庭環境（崩壊家庭、親の養育態度の歪み、児童虐待など）
- ④喪失体験（大切な人や物を失うこと：死別、病氣、失恋、友だちとの不仲、学業不振、予想外の失敗、転校・卒業など）
- ⑤事故傾性（自己の安全や健康を守れない無意識的な自己破壊行動）
- ⑥性格傾向（未熟・依存的、衝動的、極端な完全癖、抑うつ的、反社会的など）

子どもの自殺を防ぐために

子どもの自殺の特徴は、死を求める気持ちと生を願う気持ちとの間で激しく揺れ動く両価性にある。そのため、自殺を考えているサインを出していることも少なくない。直接「死にたい」と言わなくても、「遠くへ行きたい」と遠回しに自殺をほのめかしたり、大切な物を人にあげたりすることもある。自殺の危険因子を多く抱えた子どもに顕著な行動の変化がみられる場合には、自殺直前のサインとしてとらえる必要がある。

親に次ぐ自殺予防のゲートキーパーである教師やスクールカウンセラーは、苦しんでいる子どもの「救いを求める叫び」を少しでも察知できるように、変化を敏感に感じ取る感受性を磨くとともに、子どもが困ったときに相談されるような信頼関係を日頃から築いておくことが求められる。また、学校が、子どもにとって「安心」して「悩む」ことができ、「失敗」しても「自信」を失うことなく、「自己決定」できる場になることが、いじめや体罰を防ぎ、自殺を少しでも減らすために、何よりも重要なことであると思われる。

【参考文献】

- 森田ゆり 1999 子どもと暴力 岩波書店
 阪中順子 2007 学校現場から見た子どもの生と死 発達 109 pp.38-45 ミネルヴァ書房
 高倉実 2012 沖縄県の高校生における危険行動の推移：2002年～2008年. 学校保健研究 54(2) pp.170-177

理事会報告

◇第4回 2012年11月11日(日)

〈報告〉1. 会員移動(会員数885名) 2. 各部会よりの報告 3. 東日本大震災支援について(対策本部の資金が不足した際には認定カウンセラー会から支出すること。また現在の方法で支援を継続していくことが確認された) 4. 公開セミナー(2013. 1. 19早大にて「カウンセリングと心理臨床の異同」講師:田上不二夫) 5. 公開研修会(2013. 3. 10 兵庫教育大学にて「ストレス社会におけるこれからのカウンセラーの役割」:講師上地安昭・新井肇・松本剛、関西支部設立総会) 6. キャリアカウンセリング部会ワークショップ(2013. 3. 30~31ホテルコンチネンタル府中にて「自分のキャリアを考えるワークショップ」講師:今野能志・小澤康司、定員30名) 7. その他(会長より、ガイダンスカウンセラーの推薦・資格試験が始まったこと、認定カウンセラー有資格者は5年程度経過措置として推薦が適用されること、審査は認定カウンセラー会資格委員会が行うこと、前回までの審査料の半額(150万円)をスクールカウンセリング推進協議会に振込んだことなどが報告された)

〈審議〉1. 役員選挙について(2013年度役員改選に伴う作業内容と手順等が提示された) 2. ガイダンスカウンセラーの研修について(会長より、認定カウンセラー会内での研修会を検討していくことになった) 3. 自死のシンポジウム開催について(会長より提案、承認され危機支援部会が中心に進めることになった) 4. アンケートについて(「相互研究(研修)会についてのアンケート」を理事及び各部会の運営委員を対象に実施することになった)

5. 2013年度「相互研究(研修)会」の日程・会場について提案された。

現在、会場候補として早稲田大学と交渉中。従って、下記の日程は決定ではない。

会場・日程が正式に決まり次第、事務局より連絡があります。

第1回 2013年5月19日(日) 第2回 7月7日(日) 第3回 9月8日(日)

第4回 11月10日(日) 第5回 2014年2月2日(日)

◇第5回 2013年2月3日(日)

〈報告〉1. 会員移動(会員数900名) 2. 各部会・運営委員会からの報告(「相互研究(研修)会についてのアンケート」の集約結果が資料で示された) 3. 「認定カウンセラー」の名称変更について(学会の常任委員会では、カウンセリング心理士に変更する方向で検討中だが、あらためて会員のアンケートを実施し、それを参考に次期の役員・総会で決めたらどうか) 4. 東日本大震災支援について(活動補助金の状況が資料で示された) 5. 第4回相互研究(研修)会・公開セミナー(70名参加)の会計報告 6. その他(自死問題総合プロジェクト(仮称)その1:シンポジウムを第46回学会大会で行う)

〈審議〉1. 入会・退会の承認について(2012年度資格取得者で認定カウンセラー会入会者数39名、会員計900名) 2. 相互研究(研修)会のもち方について(研修会のあり方・各部会のもち方・研修会の場所等、アンケートをもとに新役員で検討してもらう。関西地区での開催を進めたい) 3. 認定カウンセラー会HPについて

2012年度 相互研究(研修)会報告(第4回・第5回)

会場:早稲田大学

◆第4回 11月11日(日) 参加者 87名

◇参加者のアンケートより(順不同)

【コミュニティカウンセリング・倫理教育部会】 講師:小山 望(東京理科大学)

〈テーマ〉「宮城県南三陸町仮設住宅での支援活動～人間関係づくり～」

- ・今回の研修ではあらためて人が人に関わるとはどういうことか、特に災害時に人間が生きている現場ですることの重要性とカウンセラーとしての資質の重要性に気付かされました。まず人に関心をもつ前に自己に関心をもつこと、そのことが他者への関心につながる、そして、支援することは自分自身が他者の自立を育む過程で生きる喜びを育むことになる(共助関係)。また、カウンセラーは心理学的知識・技術の上に人間としての業(わざ)・資源を常に育てていく必要があると思いました。
- ・被災地被災者に対して外部から支援する時に、「支援の専門家である」という意識は無力である場合があるとあらためて感じました。もっと根本的なことに立ち返って、共在・協働するところから支援活動が始まるのだと理解しました。
- ・実際に支援に行かれたお話で、現地での苦労が身にしみて感じられた。相手がなかなかうちとけてくれない時の対応に、心理的技法を取り入れた内容でその場に合わせて必死にやる気遣いが身にしみて感じられた。

【危機支援部会】 講師：田中総一郎（東北大学大学院）

〈テーマ〉「重症心身障害児者の医療を通して」

- ・いのちの大切さをどのように伝えていけるのか、その実践を開けて良かったです。“愛されている”感覚であり“いま生きていること”を子どもたち自身で実践すること、「頭は人になでてもらうためにある」という言葉がとても印象に残りました。
- ・今回の地震の時のような危機支援は、日頃からの人の関わりを（医療ならその関係で、地域ならその関わりで）育んでおくことがとても重要だとつくづく思いました。その基になるのが、命を大切にすること・人を大切にすること・愛であることを見つめました。
- ・被災地で実践されている先生の暖かい優しい親しみのあるお人柄に心を洗われました。「どの子どもも愛されるために産まれてきたのに」というメッセージを広く大きく伝えていきたいと思います。再度の講義を希望します。

【教育・スーパービジョン部会】

〈テーマ〉「自らの教育分析（カウンセリング）体験とその意義を語る」

講師：上地安昭（兵庫教育大学名誉教授） 吉田信康（認定カウンセラー）

- ・ライブでSVをみるという貴重な経験をさせていただきました。カウンセラーがどのように話を進めるのか、それによりクライアントがどのように変容していったのか、次に起こる展開にワクワクしながら参加しました。特にモーニングワークなど人生脚本にシフトしていったところには醍醐味を感じました。大学院の講義を思い出しました。
- ・カウンセリングの実際（スーパービジョン）の指示・変容・応答を細かく逐語録に再現されて、その實際を講義されてすごく勉強になりました。教育分析を受けてみたいです。
- ・教育分析の実際、カウンセラーとクライアント両者の真摯な姿勢に感動しました。支持すること、受容すること、発問の仕方、すべてが参考になりました。

【学校カウンセリング部会】 講師：三村隆男（早稲田大学）

〈テーマ〉「キャリア教育の実際と課題」

- ・キャリア教育の重要性をよく理解できましたが、具体的な取り組みが難しいと感じました。先生の一つ一つのコメントが具体的でとても考えさせられ実り多かったです。
- ・カウンセラーとして進路選択に悩む生徒の相談を受けているのですが、先生のお話を伺い自分の視野を広げることができました。カウンセリングだけでなく色々な手段を使いたいと思いました。ワークシートも使えそうです。
- ・キャリア教育の理念についてよく学びました。他府県の先生たちとの意見交換ができたのが有意義だった。（教育関係でない方には少しなじめなかったかもしれない）

【医療看護福祉カウンセリング部会】 講師：飯田俊穂（安曇野ストレスケアクリニック）

〈テーマ〉「事例検討会」～社会不安及びパニック障害への認知行動的アプローチ～

- ・身近なパニック障害について理解を深めるとともに、認知行動療法の取り組みについてこれからの学習の動機づけができた。
- ・社交不安、社会不安障害についてからパニック障害、パニック発作の違いまで今まで理解していなかったことを学ぶことができました。事例も勉強になりました。
- ・教育現場で働いていますが、ニーズのある心理職がPSWや社会福祉士で広がっていくのに違和感がありました。心理士の国家資格化、資格と現場のミスマッチを感じています。動向を開けて良かったです。飯田先生の話は毎回引き付けられます。

【キャリアカウンセリング部会】 講師：秋葉 隆（学習院大学）

〈テーマ〉「大学におけるキャリア教育」

- ・キャリアについて、就職してからも生きそうな内容でとても参考になりました。モチベーションなど就職してからも役立ちそうで、私も勉強になりました。
- ・これまで自分の狭い範囲で考えていた枠が広がったように思います。地域、教師、PTA、学校間の繋がりが必要だと思った。小学校段階からのキャリア教育の必要を感じた。
- ・現在取り組んでいる仕事に大いに役立った。まさに大学のカリキュラムに取り組んでいるところです。

◆第5回 2013年2月3日（日）参加者 147名**【危機支援部会】 講師：小林美佳、稲吉久乃（中野区役所健康福祉課）**

〈テーマ〉「犯罪被害者への支援 一性犯罪被害にあうということ」

- ・誰にも言えない心の傷が痛いほど伝わってきました。そっと寄り添う大切さは分かっている、相手を解っている、本当に私は解っているのか、つもりなのか悩んでしまいます。私自身がその環境にならなくてはと強く思います。
- ・被害者の方の生の声を伺えたことは貴重な体験でした。語られた苦しみの中から、私達に何ができるのかを色々考えさせられるきっかけになりました。

- ・明るみに出ていない性犯罪被害者の苦悩を実際にお聞きし困惑してしまっただ。何をどう支援していいのかのポイントが理解できた。病院の救急に勤務して被害者の介助にあたるが、本人の顔を見ることもなく診察に追われる状況。そこでのカウンセリングがいかに大切であるかをしみじみ感じた。

【コミュニティカウンセリング部会&倫理教育部会】

- 〈テーマ①〉 アスペルガー障害を有する学生の支援（キャリア支援の立場から）

講師：小倉泰憲（山形大学）

- 〈テーマ②〉 認知行動療法による児童生徒指導 講師：中橋美登里

- 〈テーマ③〉 DV問題/加害問題に対するコミュニティ・カウンセリング的アプローチ

講師：草柳和之（大東文化大学）

- ・それぞれの分野で実践された熱い思い・悩み・闘いを直接的に感じ取ることができ勉強になりました。また明日からの職場での活動に力を頂きました。また自分のやっていることを意識し理論化することが大切だと感じました。発表者に感謝です。
- ・発達障害（アスペルガー）の学生に対する大学学科の教育及び生活支援についての講演は、今後の大学教育においてもその方策を具体的に立案し計画することと共に実施する必要があることを痛感した。
- ・相談者の中には発達障害傾向が伺われる相談があり、その対応のありかたの一部を知れてよかった。「発達障害は病気ではない」の言葉をもとに対応したいと思った。

【教育・スーパービジョン部会】 講師：平木典子（総合的心理療法研究所）

- ・スーパービジョンについてお話を聞く機会が中々ないので大変勉強になった。小学校教員としてカウンセリングの範中だけでない臨床があり、それでもSVを受けられたらと常に思っているの、それに合うSVを探すのは大変だが必要だと思った。
- ・資格がないSVorの場合、CLに対する責任はSVorにあるというはっきりした関係性の指摘はとても大切だと思った。確かにあいまいにしていることが多い。SVで行うことは多様だということもよく分かった。今まで必要に応じて考えてきたが、バランスが悪かったかもしれないと考えさせられた。
- ・平木先生の講義は内容が高度で非常に分かりやすかった。認定カウンセラー会のスーパーバイザーの認定制度は、現在非常に不明瞭で違和感があった。新しい制度の確立を希望したい。

【学校カウンセリング部会】 講師：河村茂雄（早稲田大学）

- 〈テーマ〉 「学級集団づくりに活かせるグループ・アプローチの理論と実際」

- ・グループアプローチはいつも自分がする側で理論的な部分が後回しになっていることも多かったので、前半にそれを確認出来、後半に体験出来それぞれ良かったです。
- ・集団の状態をつかみ対応をアレンジする。学級の状態に合わせて指導法を変える。当たり前のことだけど出来ないことが多い。荒れた中高校でも学習指導要領のみに縛られている校長がいる。改善したい。
- ・学級集団づくりのゼロ段階、Q-U式学級集団づくり、クラス集団アセスメントの方法について大変興味を持ち聴講できました。自分のこれまでのやり方に今一つ自信がなかったので、非常に説得力のある講義だった。もう一度学び直したい。

【医療看護福祉カウンセリング部会】 講師：飯田俊穂（安曇野ストレスケアクリニック）

- 〈テーマ〉 「事例検討会」～なぜ“うつ”や“発達障害”が急増しているのか～

- ・ストレス解消について教育現場に即反映してみたいヒントが盛り沢山で有難かった。事例も話し合いが出来、様々な視点に気付いて良かった。
- ・今までストレスという言葉はうつにつながるマイナスイメージで捉えてきたが、実は大変広く深いものであり、根本には発達にも関わっていることを知った。今関わっているうつ状態の青年と様子が重なり勉強になった。
- ・育成歴におけるアタッチメント不足、発達課題の未達成、自尊感情の低下、自己肯定感不足がいかにパーソナリティに影響を与えるかの事例勉強はとても良かった。

【キャリアカウンセリング部会】 講師：今野能志（行動科学研究所）

- 〈テーマ〉 「社会人のキャリア教育」

- ・社会人に対するキャリア教育だけでなく、学生も含めてその内的キャリアと外的キャリアから認識していくことの意味をあらためて考えさせられました。
- ・キャリア開発への熱い思いが強い口調から伝わって来ました。キャリア教育とキャリア（ガイダンス）訓練など、より詳しく勉強が出来ました。

〈相互研究会のモチ方についての要望〉 今回も受講したい講座がだぶっており残念です。私が、SCと民間のカウンセリングルームを兼務しているから尚更、学校や医療の最新情報を求めてしまうのですが、何とか講座日数を増やすとか領域を分けて違う日程で行うとかして頂けると有難いです。（同趣旨の希望少なからずあり）

【報告】 第45回 (千葉県柏市) 学会大会 認定カウンセラー会シンポジウム

2012年10月28日 (日) 千葉県柏市 麗澤大学

〈テーマ〉 喪失と悲嘆へのケア —現状と課題—

話題提供者：水野治太郎 (NPO法人千葉県東葛地区生と死を考える会理事長)

- ・法人は自他の命の完成を目標に豊かな社会づくりに寄与することを目的として総合的なケアの視点で研究・実践を各地で展開している。

及川 敦子 (石巻市役所介護保険課副看護師長)

- ・津波に襲われた石巻市立病院で命がけの看護活動を行い、現在も地域の人々の健康面のサポートに尽力している。

尾角 光美 (一般社団法人リヴオン代表理事)

- ・自死遺族として残された者への支援の必要性を強く感じ、自らサポート組織を立上げる。

木村 健弘 (宮城県気仙沼高等学校定時制課程教諭)

- ・自らの家庭も被害を受けつつ、震災当日から生徒、地域の人々を支援し続けた。

指定討論者：鈴木康明 (東京福祉大学) 司会：田上不二夫 (東京福祉大学)

〈企画趣旨〉 ~略~ 東日本大震災から半年後、マスコミなどで心のケア、喪失への支援の必要だと叫ばれた。しかし、対象喪失は同じ出来事であろうと、個々の生き方・価値観と深く関わる問題のために個別性が極めて高い。画一的なケア (支援) は通用しない。個別性を見極めて時間をかけた、きめ細かいケア (支援) が必要であろう。~略~ 認定カウンセラー会として対象喪失から生じる心の問題に対してどのようなケアができるか、またそのケア活動のために何をどう研鑽したらよいか検討しあいたい。

◇話題提供者からの発言 (要旨)

- 喪失体験は悲嘆だけでなく、目に見えない心の世界・スピリチュアルな世界にふれる機縁となる。これまでのグリーフケアは悲嘆・困難にだけ光をあて「悲嘆が悲嘆を癒す」の理念のもとに、共に涙を流すことだけが強調されてきた (悲嘆主義)。しかし、死別経験者は喪失を人生の一部と受容して新しい人生へと再適応する力がある。「喪失の背後に隠れている多くのストーリーを見出すための支援」が求められる。ナラティブ・セラピーでは「問題が問題であって人間が問題ではない」との考えのもとに、相手を批判せず敬意をもって会話を進め、いまだ語られていない物語を引き出し、自らを語る中で問題に対抗する力を蓄える狙いがある。死者からのたくさんの贈り物に気づき、亡き人に後押しされながら生きる自分を発見し生きる意味を見出す人生支援である。(水野)
- 石巻の辛い現状報告の中から皆さんが其々課題を見つけてください。被害状況 (死者3471名・不明470名、仮設住宅131箇所・7290戸、9/30現在、雄勝病院入院患者40名と職員24名が死亡、その他詳細な報告あり)、市立病院での死を覚悟しての不眠不休の壮絶な4日間の医療看護活動、5日後に帰宅指示が出て1日かけて自宅に辿り着いたが家も家族もいない人も。壊滅状態で何も無い中でソーシャルネットを駆使して集められるものを何でも集めた。後日、看護師は他の病院での研修組と河北地域での仮設巡回組へ。無感情・喪失感・絶望感などが蔓延する避難所と仮設の住民との模索しながらのふれあい看護活動、自分も全てを失った同僚の献身的な姿を見て寄り添う仲間、支援する人の支援の大切さも痛感。組織替えにより2012年5月で仮設巡回看護を撤退。
体験・苦痛・悲嘆・喪失感・今後への意気込みなど一人一人実に違うので、その人に見合ったケアを痛感。「立ち入って欲しくないけど忘れないで欲しい、寄り添って欲しい、差別の目で見ないで」が共通の思い。前に歩みだした人もいるが、独居高齢者や病弱者などまだまだ孤立者が多いので引き続きご支援を。全国からのご支援に感謝。(及川)
- (心の中に生きているママへの手紙紹介) “失う” (病気・事故・自死・災害・犯罪・離別・失恋等々) ことへのケア。父の失踪と母の自死を体験した直後から私のグリーフが始まった。感情が反応する前に体が異常をきたし何も出来なくなったピンチが3回あった。最終的には支えてくれる人が現れて、もらった恩を送り返そうと思いグリーフの活動に加わった。あしなが育英会・アフガニスタン、1. 17. 3. 11で生まれてきたものが沢山ある。グリーフはプロセス、節目はあっても終わりが無いと思う。
リヴオン立上げは“母の日”がきっかけ。“母の日”は亡くなった母をも偲ぶ日。会としては、①毎年亡き母への手紙を書き文集にしている (「母の日なんて大嫌い」のメッセージや80歳のお爺ちゃんも喜んで書いている) ②いのちの授業 ③Yes for you 自死遺族支援 ④「それでも生き続ける—自死遺児たちのおもい」 ⑤「大切な人を亡くしたあなたへ」の冊子の普及。来年度は10箇所ですべて自死遺児たちに総合的な支援を届けようと準備している。僧侶・警察・葬儀社との連携も必要 (石巻市洞源院の例など)。留意していることは、「気にかけているよ」を発信し続けること (「頑張る」と「助けて」は車の両輪)、そして、“聴く” (耳+目+心) こと、ジャッジをくださないこと、

「まさに」を大事にすることなど。(尾角)

○気仙沼高校、地震発生時生徒300名・職員63名在校、そこへ約1000名が避難して来た。体育館や教室を開放。避難用の物資用具等の備えなし。ガス電気ダメ、水道は隣接の市立病院から。教室のカーテンを巻いて寒さを凌ぐ。交通手段がない中で生徒の安否確認62箇所(1人行方不明)、4月に入り徒歩で再度生徒の生活状況調査。避難者への食料確保が難儀した。4月に余震、21日始業式22日入学式(入学者2名)、通学等の困難者対策(寄宿舎も)、5月9日授業開始、定時制は照明がないので短縮繰上げ授業、避難者の後押しで文化祭実施、9月27日避難所閉鎖。11月現在、在籍37名(津波被害11、仮設6、親戚等に居住5)。被災生徒の進路(進学・就職)について「若者サポートステーション」と連携した。震災直後内定取消し2名、アルバイト13名中11名解雇、待機2名。不登校・発達障害生徒に対する対策、ギター教室や丁寧な就職指導等。柏市のスポーツ関係者から野球用具の寄贈あり。為末選手の支援で被災高校の陸上部が元気だ。私の地元では家を失った人を被害が少なかった家で3か月間民泊させたが物資の確保が大変だった。支援時の心構え・服装など留意を。観光視察に来る人々のマナーの改善。(木村)

◇参加者とのやりとりから

- ・“不安”を軽減するというが、不安はあってはいけないの? “不安”・“心配”・“恐さ”などの感情の扱いを見直す必要があるのでは?
- ・感情と生存に関しては Do not judge。感情を引き受けたくないから judge するのでは?
- ・自殺者が3万人を越えるのに我々は何をしてきたのか? グリーフカウンセリングと宗教、グリーフ教育と宗教教育の必要性は?
- ・生きている人の不安、生と死に対するケア、そして「あの世」のケアも必要。西洋ではグリーフケアは宗教と結びついている。人間関係ではなく超越した何かが必要か。
- ・宗教で助けられた癌患者が少なからずいる。一緒に考えていってよいのではないか。
- ・危機状態で「お経をあげてください」とどの宗派でも求める人がいる。49日法要で僧侶が付き添ってくれる。僧侶はカウンセリングを学んではいないが、色々な団体とのコラボでケアを学んでいる。
- ・全国の宗教団体が多く被災地に入ってきて助かった。信仰の強制はいけませんが、科学的な宗教教育は必要。
- ・宗教はカウンセリングの効果的な仲間。
- ・神の手先であってはいけない。グリーフケアは悲嘆を癒すのではなく悲嘆を包み込む、もう一つの希望を持ってもらうこと。

◇感想

- ・3千人のグリーフケアの体験から導きだされたナラティブ・アプローチ。死者からの贈物に気づき未来への希望を掘り起こす姿勢は、現在のグリーフケアを一步先に進めるものと実感しました。被災地での壮絶な救援・支援活動、2年前から仮設支援を続けている私達はその労苦に大いに共感でき、これからがカウンセリングの本番だと実感しています。自死遺族ケアは危機支援部会でも継続的に取り組んでいるところであり、今回のお話で更にこの輪が広がっていくと感じました。皆さん、ありがとうございます。
- ・2013年度第46回大会でも企画しています(名称変更があるかも)。大勢の方の参加をお待ちします。

(まとめ・感想 広報委員 阿部正直)



話題提供者の皆さん(左から水野・及川・尾角・木村の各氏)

【報告】 第45回(千葉県柏市)学会大会 認定カウンセラー会企画ミーティング

2012年10月28日(日) 千葉県柏市 麗澤大学

〈テーマ〉 死別の悲しみをわかちあうために PART II —危機支援部会—

出席者：荒川孝一・安間亜佐子・笈田郁子・田丸祐子・東田恭子・深谷真理子・水田聖一郎

コーディネーター：鈴木康明（東京福祉大学）

〈実施にあたって〉

・ 昨年の第44回大会に続いて2回目の企画です。今回は、次の事柄を目指します。

(1)「わかちあいのグループ体験」を通して、グリーフにかかわる際に必須な内省とはどのようなものを意味するのかについて学ぶ。(2)発表と講義と観察から、グリーフ（哀悼の過程も含めて）とグリーフワークについて正確に理解する。(3)あわせて、基本的なかわり技術について具体的に学ぶ。

◇わかちあいの会に参加して（3名の発言より）

・ 参加者の意識、参加形態、話す人、話さない人、全国からの参加、等々さまざま。安心安全の場である。このグループの中で話したい、聞いてもらいたい。新しい人でもすぐにはいれる。おばを亡くしたあと出席した時はおばを偲ぶよい時間になり一層身近さとありがたさを感じた。私も話さないこともあり大泣きすることもある。今後は会を効果的に運営できるよう力量をつけたい。

・ 「かもめの会」（北茨城市被災者支援）の活動に無力感を感じることがある。肉親・親類・生活基盤・地域社会を失った人々と他の地域から支援に入る者との目線の違い。自分を語らなかつた女性が家族のことなどを話してくれた時は嬉しかった。祖父母・父の死に向き合ったことで変わった。死別体験にふたをして向き合つてこなかつた自分を本気で見直したい。わかちあいの会での目線がさがり空気のようになった私達。「だれも批判しない、評価しない、おしつけない」を心して掘げていきたい。

・ 勤務校で生徒を亡くした体験を話してもいいのか？で参加した。あふれたらどうしよう、恥ずかしいなどの恐れから悲しさ・後悔・自責の念にふたをして語れなかつた自分。以前は感想もあたりさわりのないことを話していた。この会に参加して、知り合いが居ないこと・安心感があること・沈黙OK・ルールが守られていることなどから、背中を押される気持ちで穏やかに語り、泣けるようにもなった。私には癒しの場・多くの気づきの場・前を向いて生きていく場となっている。グループの相性もあるだろうが、いろいろなグループがあつていい。

○鈴木康明先生より 1.安心安全を保障するために 2.支援者が自分自身に気づいているのかについて 3.“オーロラの会”の約束について、の講義がありました。

◇公開「わかちあいの会」（デモンストレーション）

「楽しかったこと・話したいこと」をテーマに30分間、5人の自由発言。感想を1つ掲載。

・ 最初は沈黙が続き男性は耐えられない。何かを話さねばとあせる。しかし半年後は、心を通わせている時間・空間・共通体験の場と感じられ沈黙も心地よくなる。

◇わかちあい体験（グループ体験）

6～8名のグループ体験から、表現することやわかちあうことの意味を体験的に理解する。

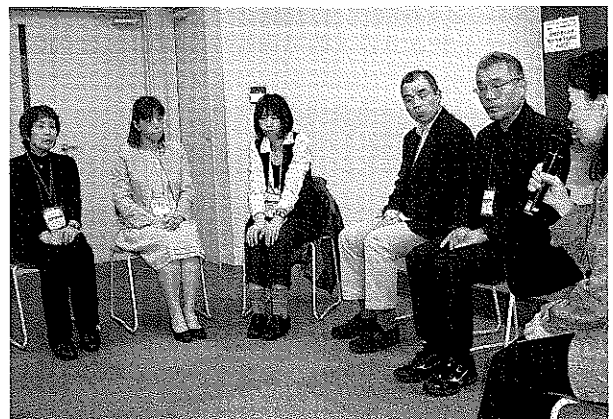
・ あるグループのグループ体験後の感想

・ 沈黙が苦痛に感じなくなった ・ 楽しい話を聞くと心がほぐれてくる ・ 肉親の死がグリーフに導いてくれた
 ・ 日常を話しているだけなのにカウンセリングを受けているような感じがする ・ 沈黙が心地よい ・ 楽しみ、悲しみに包まれることも楽しい(?) だろうな ・ 私にとっても貴重でした（ファシリテーター）

◇感想

・ 昨年の第44回大会に引き続いてのミーティングでした。参加者は昨年を上回ると共に参加者のグリーフケアに求めるものが広く深くなっていることを強く感じました。災害被災者・犯罪被害者等への支援の場面は、残念ながら限りなく存在します。私達は「わかちあいの会」の先駆的な経験から学ぶと共に、今回のわかちあい体験を活かしてまず一歩踏み出しましょう。

（まとめ・感想 広報委員 阿部正直）



「わかちあいの会」デモンストレーション

【報告】 認定カウンセラー会主催 公開セミナー (2013. 1. 19 早稲田大学) 「カウンセリングと心理臨床の異同」に参加して

早稲田大学大学院教育学研究科 川俣 理恵 (認定カウンセラー会理事)

1月19日(土)に早稲田大学にて、日本カウンセリング学会認定カウンセラー会主催・公開セミナーが開催されました。当日はセンター入試の日程とも重なっておりましたが、学会員を中心に、早稲田大学の大学院生等、70名程度の方々にご参加いただき、和やかな雰囲気での開催となりました。

本セミナーでは、カウンセラーと臨床心理士の区別がほとんど行われていない日本の現状について、カウンセリング心理学と臨床心理学の歴史的経緯をたどるとともに、カウンセリング心理学の専門家の今後進むべき道としてどのような可能性があるのかということについて、東京福祉大学教授の田上不二夫先生よりご講演をいただきました。

まず、カウンセリングの定義について、日本カウンセリング学会の定義とACAの定義から、カウンセリングとはクライアントの個性や生き方を尊重し、クライアントが自己資源を活用して、環境への適応と対処等の諸能力を向上させることであり、個人への援助だけでなく環境調節も不可欠であることが示されました。そして、クライアントが本来もつ力を発揮できるように科学的な理論と方法論に基づいてエンパワーすること、クライアントの問いに対して、「こうすればいい」という答えを返すのではなく、クライアントの成長を願って「どうすればよいか一緒に考える」というスタンスで関係を構築することが専門的カウンセリング関係であることのご示唆がありました。また、カウンセリング心理学と臨床心理学・精神医学の歴史的経緯についても、「心とは何か」という人間のもつ本来的な問いは、靈魂の問題と考えられていた時代から、脳に心の中核があるという考え方へ、さらに時代の変化に応じて分化し現在に至るまでの経緯について、図表を用いてご説明いただきました。これらのお話から、普段のカウンセリング活動では改めて考えることの少ない基本的な内容をわかりやすく解説していただき、初心に戻るような思いがいたしました。

後半は、スクールカウンセリングを例に挙げ、日本へのカウンセリング導入に関して、日本とアメリカの文化的背景の違いについてのご指摘がありました。日本で求められるスクールカウンセラーの資質は、①個別カウンセリング、②教員との協働・連携、③教師のエンパワー、④諸問題への対応マニュアルの作成等、多岐にわたることが挙げられ、制度やシステムの違いから、アメリカのモデルがそのまま日本のニーズには対応しない可能性が指摘されました。また、資格社会ではないために、他の職業との領域のすみわけが難しい日本において、「つなぎ役」としての役割の有効性が示されました。そして、今後カウンセラーが進むべき道として、専門性を発揮できる新たな仕事を生み出し、自らの手でその価値を売り込むことが必要であるという力強いお言葉があり、私自身もカウンセラーとして今後ますます励んでいかなければと感じました。

【報告】 認定カウンセラー会主催 公開研修会 (2013. 3. 10 兵庫教育大学)

テーマ 「ストレス社会におけるこれからのカウンセラーの役割」

講師 上地安昭・新井肇・松本剛 (参加者54名)

※この日、日本カウンセリング学会関西支部会が創立されました。

【報告】 石巻市仮設住宅支援活動の経緯 (3)

報告：阿部 正直 (危機支援部会石巻支援班)

★第1次計画(2011年12月～2012年3月、4か月間)の経緯については、ニューズレター第11号特集(2012.4.1発行)の9ページに報告しました。また、第2次計画前半(2012年4月～9月)の経緯については、ニューズレター第13号(2012.10.1発行)の5ページに報告しましたが、今回、後半(2012年10月～2013年3月)の経緯と併せて、第2次計画全体(12か月間)の概要を報告します。(詳細は対策本部に提出してあります)

◆第2次計画(2012年4月～2013年3月、12か月間)

<ねらい> ①住民とのふれあい ②住民のコミュニケーション促進のお手伝い
③支援活動の定例化と活動地域の拡大 ④個別家庭訪問の強化
⑤行政機関との適切な連携 ⑥参加スタッフを増やす ⑦その他

<訪問日数> 多目的団地13日、河川団地12日、大森第3団地12日、
飯野川校団地7日 (毎月第2木金土訪問) 計 延44日

<参加住民数> 多目的団地延228名、河川団地延195名、大森第3団地延185名、
飯野川校団地延45名 計 延653名

<個別家庭訪問> 4団地 計 延142名 <参加スタッフ> 計 延219名

<個別相談回数等> 延約45件 <行政への報告> 毎月、各団地数名あり
(健康不安・生活不安・DV・人間関係・住まい・生き方・愚痴・要望・他)

<総括と第3次計画について> 2013. 3. 15参加スタッフの検討会より

1. 学会・認定会の対策本部とNPO埼玉カウンセリングセンターとの協働活動により効果的・有効に活動が開けてきた。(事務所の新設・レンタカー、等々)
2. 活動の定例化(毎月第2木・金・土曜日に訪問)と継続的な訪問、活動地域の拡大、行政との効果的な連携(協働活動・情報交換・報告連絡等)などにより、仮設住民とのふれあい、住民のコミュニケーションの促進などの面で前進がみられる。
3. 集会所に見えない方への個別家庭訪問を強めたことにより、独居高齢者・病弱者・人間関係を避けている方などとふれあうことが出来ている。
4. 手芸品の販売協力は、自立支援にとどまらず被災地と風化が始まっている都会をつなぐ大きな役割を果たしている。
5. 学会・認定会内での活動参加への広がりが弱く、今後の参加に期待したい。
6. 今後について
 - ① 行政の後退(包括支援センターなどは13年度予算が3分の1減)・ボランティアの撤退が続く中で、行政からの要請もあり、私達の継続的な活動が益々求められている。
 - ② 学会・認定会の危機支援活動の意義を再確認すること、活動内容の吟味(集会所での活動、個別家庭訪問=相談活動のシステム化、男性や子どもを対象にした活動の計画、コミュニティカフェの復活、行政との一層の協働活動、仮設から復興公営住宅へ移った方へのケア活動、等々)が引き続き必要である。
 - ③ 参加スタッフが増えることを期待したい。そのために引き続き財政的援助を求めたい。また、学会員以外の参加者(例:学会員でないが講座を修了した危機支援サポーター)についても援助を考えてはどうか。

被災地は、いま ～石巻市仮設住宅支援から～

石巻班：阿部 2013. 3. 17

- ◇あの日(2011. 3. 11)から丸2年が経過。最大の被災者を出した宮城県石巻市、今なお7112戸のプレハブ仮設住宅で16425人(2月現在、朝日新聞3. 11より)の人々がこの冬の記録的な極寒の中を身を寄せ合い春を待ちわびています。いま、仮設住民の方々の最大の願いである住宅に関しては、4000戸の復興公営住宅予定に対してまだ490戸、3300戸の自宅再建戸数に対してまだ0戸(2月現在、東京新聞3. 9)という驚くべき実態です。
- ◇私達日本カウンセリング学会認定カウンセラーは、一昨年(2011年)の12月から毎月3日間、石巻市河北地区の4カ所の仮設住宅で、主に心のケア活動を続けています。足湯をしながら辛い話をお聴きし、お茶っこをしながら同じ境遇の人達と苦しみ分かち合い励ましあってきました。集会所に見えない方には家庭訪問をして、安否・健康確認と個別相談を行っています。そんな中、この2月の活動中に50代半ばの男性の死亡に接しました。腕のいい理容師でしたが、その技術を活かすことなくアルコール依存症となり緊急搬送の翌日の死去でした。私達が毎月訪れていただけに本当に無念です。
- ◇4カ所の仮設住宅の状況は様々ですが、同じ地区から避難してきた方々が集まっている住宅は、早くからコミュニケーションが成立し自治会組織も早く立ち上がり、今は復興公営住宅に関してまとまって強く要望を出しています。また、昨年の6月には仮設のおばさん達の中から自発的に手芸品を作るグループが生まれ、大川小学校で子どもを亡くした母や祖母の方が供養地蔵を作成したのをきっかけに、つるし雛・姫だるま・ねこペンダント・ふくろうペンダント等々、創意あふれる作品が沢山生まれました。この手芸品製作は住民の人々の復興と自立に繋がり、活気が生まれています。
- 私達の仲間は、それぞれの地域や仕事場でこの手芸品を販売し協力しています。私は相模原市内の公民館まつりや学校のPTAバザーなどで精力的に買ってもらっています。持参した作品はどれも1時間で完売です。
- ◇一方、最後に「寄せ集め」的にいろいろな地域から集まってきた住宅では、自治会組織の立上げも遅く、今でもコミュニティの成立が遅れています。集会所に集まって来られる方も「お客様」の感じですが、行政の積極的な関わりや自治会長の奮闘もあって、地域清掃やイベントへの参加等を通して急速にまとまりつつあります。

◇この3月14～16日はばかばか陽気の中で活動が出来ました。春を間近に心なしか明るい感じの皆さんでした。16日は復興公営住宅の説明会、「しっかり聴いて要望を出してくる」と意気込んでいました。世間では報道の減少と共に3.11は忘れ去られていきます。アベノミクスとやらで浮立つ都会の雰囲気と復興がまだまだ進まない被災地とのこの温度差。継続して現地に入っている感覚からすると、復興・自立はこれからが本番です。これからも被災地に想いを馳せると共に、第2次計画の総括を活かして仲間と一緒に支援活動を続けていきます。多くの方の参加を待っています。

INFORMATION

◇2013年度の相互研究（研修）会の日程と会場については、決まり次第連絡があります。

◇2012年度認定カウンセラー資格取得者（認定会入会者）

秋光 恵子	阿久津里美	新井 礼子	大友由美子	大村 典子	岡田由貴子	沖野 満江
笠原万左枝	春日作太郎	亀井ゆかり	川井田洋一	木立 正敏	栗田よしみ	合田 吉博
小堀 潤子	齋藤 令子	佐々木良二	宍戸 初美	高野 正美	高野由紀子	竹原 澄子
田中 久子	田村 聡	都筑 佳奈	中居 敏子	仲村 和之	中山 康子	深田 浩子
※福本 泰洋	藤生 英行	藤原 靖久	町田 陽子	松本 千枝	三浦 真澄	梁島 悦子
吉澤 恵美	吉澤 孝子	吉田 弥生	渡邊 直子	(39名)		

※2012年度以前に取得され今年度に入会されました。

◇日本カウンセリング学会 2013年度（第46回）大会の日程

研修会 2013年8月30日（金） 大会 8月31日（土）～9月1日（日）
会場 東京電機大学

◇日本カウンセリング学会支部会が、8支部会になりました（2013年3月末現在）

長野県支部会・栃木県支部会・北東北支部会・東関東支部会・東京支部会・
神奈川県支部会・静岡県支部会・関西支部会

◆楡木満生先生がご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

昨年10月11日に急逝されました。学会及び認定会に多大な貢献をされ、カウンセラー仲間にも深く慕われ尊敬されてきました先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

（学会会報No92号2012.12.1発行に、学会理事長山口正二先生の追悼文が掲載されました）

○「かもめの会」（危機支援部会北茨城市支援）の活動報告については、最終活動日が入稿以後でしたので、後日別途報告いたします。

【編集後記】

- ・今号では、教育の喫緊の問題である「いじめ・いじめ自殺（自死）・体罰」を特集として取り上げました。今回の掲載記事が、教育に関わっている多くの仲間の指針になれば幸いです。また、危機支援部会でもこのテーマに継続的に関わっていく方針です。
- ・現広報委員は第3号から携わってきましたが、今号が最後です。折々の課題と報告を中心にお届けしてきましたが、何と云っても災害支援におけるカウンセラーの役割に心底向き合わされ、紙面を通してどう会員の方々に伝え共通認識を得て行動化していくかでした。この命題は現在進行形です。長きにわたってのご愛読ありがとうございました。